2020 年 8 月 17 日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部

教員研修　成果報告書（Web 公開用）

1.所属	文学部 美学美術史学科
2.職名・氏名	准教授・織田涼子
3.研修期間	2019 年 4 月 1 日　～　2020 年 3 月 31 日
4.研修先機関（国名）	国立大学法人 東京藝術大学 日本画研究室（日本）
5.研修課題名	岩絵具による風景画の創作と彩色技法の研究
6.研修経過 （月単位で記載してください） 例）4 月上旬～5 月下旬：	日本画の専門性を高めるため、研修先機関の 2019 年度私学研修員として教授・齋藤典彦先生に師事し、日本画の材料及び表現技法に関する研修、並びに風景を主題とした制作研究に従事した。 4 月上旬～5 月中旬：日本画のものの見方、基礎的な制作手順を学び直し、これまでの素描、小下図、大下図、本画の制作方法を振り返り、各工程の課題を設定した。 5 月上旬～6 月下旬：素描の課題を解決するため、植物園で実際の景色を描き、東京藝術大学日本画第二研究室の研究発表展に出品、対象の見方や日本画の「線」について知識を深めた。 6 月中旬～7 月下旬：日本画の材料及び技法に関する集中講義を聴講し、絵具や箔などの画材、膠やドーサなどの接着剤、和紙や絵絹などの基底材について知識を広げた。 7 月下旬：30 号 F サイズの風景画 2 点を大学院合同研究会に出品、対象の見方や表現方法について考察を深めた。 8 月上旬～10 月上旬：実際の景色に即した統一的な空間表現を目指し、100 号 S サイズの本画の制作方法を検討した。小下図は単彩で作成し、下図の明暗構成を参考に岩絵具での彩色を試みた。 10 月下旬：上記作品を公募展に出品、岩絵具の色調及び質感の見え方を展示会場で確認し、彩色工程の適正を検証した。 10 月上旬～12 月下旬：筆の製造、大判和紙や絹本の裏打ちに関する講義を受講し、日本画の材料に関する知識を深め、表現技能の向上を図った。 11 月～1 月中旬：大判和紙の裏打ちを復習するため 100 号 F サイズの風景画を制作、単彩に近い彩色方法を試みた。 1 月下旬：上記作品を研究会に出品、墨や胡粉を使用した下地及び岩絵具による彩色工程の問題点を分析し、本画の空間表現に関する課題を整理した。 2 月上旬～3 月：風景画の空間表現に適した材料を選び直し、表現内容と彩色技法の関連を強化するため大下図の工程を改善し、公募展出品用の 30 号 F サイズを制作した。

7.本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）	日本画の材料及び表現技法に関して知識を広げ、多様な表現への理解を深め、岩絵具による彩色技能を向上させることができた。研究発表展に参加し、実景を見る視点を学び、素描と本画の関連性を強化した。 風景を主題とした日本画制作において、表現内容に適した手順及び材料の製法について理解を深めることにより、日本画の専門性を高め、制作内容を一部改善することができたと考える。 制作の成果は、研修先機関の研究発表展及び一般社団法人創画会が主催する公募展にて発表した。 〈研究発表展〉 東京藝術大学日本画第二研究室研究発表展「素描展」出品。 会期：2019 年 6 月 15 日（土）～6 月 28 日（金） 会場：東京藝術大学大学美術館陳列館 〈公募展〉 1.「第 46 回 創画展」入選、東京展・京都展に巡回展示。 東京展　会期：2019 年 10 月 24 日(木)～10 月 30 日(水) 会場：東京都美術館 京都展　会期：2019 年 11 月 26 日(火)～12 月 1 日(日) 会場：日図デザイン博物館/京都市美術館別館 1 階 作品名「栗の居所」 制作年月：2019 年 10 月 サイズ：162.0×162.0 ㎝ 材料：雲肌麻紙・楮紙・岩絵具・胡粉・墨・木炭 2.「第 46 回 東京春季創画展」入選、展覧会図録に掲載。 展覧会は新型コロナウイルス感染防止の影響で開催中止。 作品名「圃場」 制作年月：2020 年 3 月 サイズ：91.0×72.7 ㎝ 材料：白麻紙・薄美濃紙・岩絵具・胡粉・墨
8.所感	東京藝術大学日本画研究室で継承されてきた制作研究について幅広く学ぶ機会に恵まれ、素晴らしい環境で自身の制作を見直すことができた。対象の見方、材料の扱いに関するさまざまな課題に対して細やかな指導を受け、素描、下図、本画の問題点が明瞭になり段階的に解決へ向かうことができた。 制作意図を実現するためには、岩絵具による彩色技法のみならず伝統技法を踏まえた制作の在り方について広く知ることが重要であると感じた。実際に触れて学ぶことにより表現と材料の関連について意識を高めることができ貴重な経験となった。一年間の有意義な研修の機会を得たことは感謝の念に堪えない。 日本画は、基底材の加工や材料の調合など、表現内容に適した製法に習熟する必要があるため、引き続き研鑽を積み重ね、研修で学んだことを実習指導や個人制作に活かしたい。